



心配性ママのプロジェクト探訪記

JST 社会技術研究開発事業 平成19年度採択課題
系統的な「防犯学習教材」研究開発・実践プロジェクト

私は小学生の女の子を持つ心配性ママです。このごろ、何かと物騒なニュースが多くて、子どもの安全が心配でたまりません。そんな不安に応えようと、「犯罪からの子どもの安全」では、子どもを守る防犯対策に科学的な知見や手法を取り入れた社会に役立つ研究開発に取り組んでいます。その取り組みの一つ「系統的な『防犯学習教材』研究開発・実践プロジェクト」取材することができました。

このプロジェクトでは、地域の防犯指導者（防犯リーダー及び防犯コーディネーター）を育成するシステムづくりに取り組んでいます。それは、地域の人たちが防犯活動・指導について学ぶ「防犯指導力育成プログラム」と、使う人のニーズに合わせて既存の防犯活動・指導に関する情報を抽出してくれる「多次元防犯指導支援システム」を含んでいるとのこと。

子どもたちの安全を守るために、どんな人たちが知識や経験を活かそうとしているのでしょうか。4グループから成るこのプロジェクト。各グループを代表する4人に、日常の具体的な活動やご苦労などを伺いました。（以下、敬称略）

まず、グループ1からこのプロジェクトの代表者である**坂元 昂**さん

（日本教育工学振興会・会長）にお話を伺いました。 平成20年10月30日・東京



プロジェクト代表の坂元昂さん(右)
グループ1の増田迪博さん (左)
西江麻由美さん (中)

● 「子どもを守る防犯リーダー、コーディネーター」
ってどんな人？

坂元：「子どもを守る防犯リーダー」は地域の方々、PTA、学校の先生たちの中から、子どもを守ると同時に子ども自身に防犯力をつけるための指導をする人です。その防犯リーダーたちをまとめ、お世話をする人が「子どもを守る防犯コーディネーター」で、行政・警察とのパイプ役や、参考資料の提供など、防犯リーダーをサポートする役割の人、と私たちは位置づけています。

今まで長年のご経験によって培われた「勘」や「コツ」に加えて、更に、科学的に裏付けられた能力をもって子どもを守る活動をしていただこうということです。

☺ なるほど、「科学的」というのがミソですね。

● プロジェクトを進める中で、予想外だったことはありますか？

坂元： 日本教育工学振興会には、教員指導用テキストの作成という実績があります。

このプロジェクト当初の研究計画は、その経験を随所に活かした理想的なものですが、それを応用して防犯活動という世界で実践しようとしたときに、今までのようにはいかないことができました。

教育関係の行政と連携すれば隔々まで情報伝達が可能で、学校も協力してくれます。ところがその先、ボランティアでその地域の防犯活動をしている人たちに対して命令はできませんし、そういった方々は、長年の経験と実績をお持ちなので、私たちの防犯教育システムを一方向的に押し付けられるのは困ると言われたりもします。

また、それぞれ地域は画一的ではありませんから、その特性を活かしながら対応策を考えて試行錯誤し、現場で生じる問題に柔軟に対応しなければなりません。相手の考えや意向を尊重し、そのノウハウとこちらの情報とをギブアンドテイクしながら良い学習教材を協働で開発する、そして、お互いに伸びていきたいと思いますという姿勢で進めています。

学習教材に漫画やイラストを取り入れたり、ビデオを製作したり、親しみやすくわかりやすくなるよう工夫しています。こうしたものがあれば一般化しやすく、地域格差も減り、全国的に防犯のレベルが上がるのが期待できますよね。

地域どうしのつながりを深めるためにも、情報の提供など、お役に立てる可能性は十分にあるはずです。何かと大変なときもあるけど、ニコニコ笑いながら処理していきますよ。抵抗感があればあるほど、やりがいもありますね。

☺ 柔軟でチャレンジング、キーワードは「協働」ですね！

● 現在の進行状況と今後の見通し

坂元： 地域ごとに修正を加えた教材で実践し、科学的裏づけをもって効果を分析し、データを出すところに技術があります。人を集めて講義をして終わり、というのではなく、他の地域とデータを持ち寄って比べ、どう改善するか相談する。これを繰り返します。1年後にはもっと地域との連携が取れてさらに結果が出てくると思います。現在、このプロジェクトは大変円滑に進行していますので、終了する（平成24年）ころには、今は歓迎していない人々にどう普及するかという活動と研究をしているだろうと予想しています。

グループ2の**目黒 公郎**さん（東京大学生産技術研究所・教授）とグループ3の**原 克彦**さん（目白大学社会学部・教授）にお話を伺いました。 平成20年11月9日・東京

グループ2の
目黒公郎さん



グループ3の
原克彦さん



● 研究のご専門は何ですか？プロジェクトに関わるようになった経緯は？

目黒： 都市震災軽減工学といって、地震の被害を最小化するためのハードとソフト両面

から研究をしています。もともとはエンジニアリング的な課題を解決するための研究をしていましたが、実社会の問題を解決する上ではそれ以上に、経済や社会制度などの課題が重要であることも多いので、次第にそういった課題にまで踏み込んだ検討をするようになりました。また、災害のメカニズムと防災対策について、あるレベル以上理解し、具体的に活動できる人をつくろうとの考えから、「防災士」という制度の立ち上げやその育成のお手伝い、途上国を中心に世界各地の地震防災の立ち上げ活動も実施してきました。「防災対策の実現における子どもの重要性」を痛感しているのですが、日本のような先進国では、女性、特にお母さんが重要な存在で、お母さんが子どもに読み聞かせるような絵本なども作ってきました。

今回のプロジェクトは、防災と防犯は一緒に進めていくのが合理的・効果的だと考えていたので、今までの活動やその成果を活かせるいい機会として取り組んでいます。

● 原さんはいかがですか？

原： もともと、学校教育を中心に活動していて、子ども向けのわかりやすい教材開発を長年続けてきました。最近は先生方の授業力を高めるためのマニュアルや仕組み作りをしています。例えばイラストでわかる授業設計の方法や、総合的な学習をどう進めたらよいか、そのカリキュラムの作り方など、何冊か本を書いたりしました。

その中で子どもの安全を守る防犯リーダーを育成するためのカリキュラム作りをしたいという話が来て、参加することになりました。カリキュラム作りは目黒先生の研究に大きく関係しますので、交流しながら進めていくようにしています。

● グループ2で取り組む「多角的防犯指導支援システム」とはどんなシステムですか？

目黒： 危機管理マニュアルや防災マニュアルについての研究をこれまでも行ってきました。災害が起こったときの状況を踏まえ、時間経過に伴って、自分が何をすべきかを瞬時に編集し、「その人」用のマニュアルを提示するものです。

このような機能を活用して、子どもの防犯活動を支援するシステムをつくろうとしています。具体的には、被害者、犯罪者、第三者としての「主体/人間」、犯罪としての「事象」やその「空間」、地域の「環境」や「季節」、「天候」などを分析軸として、これまで各地で行われてきた防犯活動や教材の中から、条件に合うものを容易に選別し利用できる環境を用意したり、年齢や場所などの条件を入力すると、瞬時に「こんなタイプの子は、こんな犯罪に巻き込まれやすい」という情報が入手できるようにします。

さらに重要なことは、この機能によって子どもの防犯に関わる各種の活動や情報をさまざまな角度から俯瞰することが可能になり、また将来のあるべき方向性などの議論がしやすい環境が整います。例えば、原さんが担当する教育カリキュラムについても、その内容が子どもの防犯を実現する上で重要な能力や環境の全体像に対して、どの部分を担っているのか、全体のバランスはどうか、どの部分を補強していく必要があるか、などがわかりやすく提示されるわけです。その結果に基づいて修正などを行えば、グループ同士でうまく協調した研究活動ができると考えています。

☺「多角」というのはさまざまなファクター、視点のこと。多角的に分析して全体を俯瞰できるシステムの実現を目指しているということですね。

● グループ3の役割は？「防犯指導力育成プログラム」とは？

原： 私のところは、現場に出て行って意見をたくさん聞いています。その地域で起こっている現象については、皆さん専門家ですから。全国を回って地域ごとの特性を洗い出し、とりあえず防犯リーダーとしての「能力基（規）準表」というものができ上がりました。でもこれを示したら、ある地域ではこんなたくさんできないとか、うちではいけないとか言われて…。それは当然ですので、その地域に合わせて調整し、その地域に合った研修システムをつくり上げていこうとしています。地域に合ったカリキュラムと関連するビデオ教材による勉強などにより、子どもを守る防犯リーダーやコーディネーターを育てていこうとしています。

☺ 地域の特性に応じたカリキュラム作り、ですね。

● 人づくりが重要なポイント

原： 全国を取材していますが、どこも協力的で、警察などでも多くの資料を提供してくれます。注目したのは、防犯活動にあたって、多くの地域で活動が長続きせず「人づくり」に苦労しているということです。「防犯リーダー」がその地域に根付くためにはそこが大事です。教材ではまかなえないところですからね。それをシステムの中にどのように埋め込んでいったらいいのか、少し苦労しているところです。

子どもを守る防犯リーダーやコーディネーターは、恐らく同質のものにはならないと思えます。目黒先生のシステムの中に「主体／人間」という要素がありますが、能力の特性に応じて「主体」別の研修カリキュラムができると面白いと思います。地域や人物の特性を活かして多くのリーダーを育てるシステムになったらいいのではないのでしょうか。

● 実践の最前線で—— 地域の問題に遭遇 ——

目黒： 人が大事だし、いろいろな人で構成されているのが地域ですよ。防犯も防災も基本的には地域と人の問題です。これらの中には、われわれ研究者の立場からはちょっと立ち入りにくい地域特有の問題や簡単には扱いきれないものもあります。

原： そういう面を、このプロジェクトで手を出していいのかどうか。地域づくりまで踏み込んでしまうとちょっと大変です。

目黒： こちらからは口出しはできませんので、地域内の当事者の皆さんに味方になってもらうしかない。このプロジェクトで課題全体を解決する提案ができるといいのですが、かかる時間、お金、規模を考えると容易ではありません。特に地域特有の問題までを対象とした解決策の提示は本当に難しい。一方で、その部分に立ち入らなくてもやれることは他にいっぱいありますから、一所懸命頑張って結果的に成果ゼロという課題よりは、着実に解決できるもの、実施可能なものから、成果を挙げていきたいと考えています。

原： そうです、私もそう思います。

> インタビューが終わってからのこと、研究にご多忙なお二人のこんな会話を紹介します。

目黒： 「防災」やってる人って「忘妻」なんだよね。 ざぶとん1枚！

原： じゃあ、「防犯」やってる人は「忘伴（侶）」ですかね。 ざぶとん、もう1枚！

お後がよろしいようで。☺

グループ4の堀田 博史さん（園田学園女子大学未来デザイン学部・准教授）を訪ねました。平成20年11月18日・尼崎

● 研究のご専門とプロジェクトに参加された経緯をお聞かせください

堀田： 私の専門は教育工学です。特に幼児と小・中学生を対象に、メディアを教育の中で有効に使うことを研究しています。また、大学の専門授業などを一般に公開する「そのだインターネットキャンパス」の所長もしています。その中でeラーニングシステムについても研究をしていて、幼児の母親や先生向けのeラーニングサイトを構築した経緯がありました。今回のプロジェクトでも実際に学習サイトをつくるので、その部分を担当できないかと、お声をかけていただきました。



グループ4の堀田博史さん

● 堀田さんのグループの役割は？

堀田： 基礎となるデータをもとにしたシステムを開発するグループです。警察、教育委員会関連資料のデータベースを作成しています。データはグループ1からもらって蓄積が続いてますが、ずいぶん作業は進みました。これは最終的にはグループ2の多次元防犯指導支援システムに統合されます。あくまでシステムを開発するグループですが、そのシステムは決して機械的なものでなく、インターネットに接続はされていても、そこに人間の温かみであるとか、子どもを守るための情熱みたいなものが伝わるような中身にしたいですね。そういう工夫はわれわれの研究の成果からきつとご期待に副えるものができると思いますよ。

☺ 機械であっても人間の温かみや情熱が伝わる……期待しています！

● 新しい分野で見えてくること

堀田： 私の研究はこれまで、現場に行って子どもや保護者や先生と接触することが主でしたが、このプロジェクトは防犯の世界ですので少し勝手が違います。私は一步身を引いた形で取り組まねばなりません、しかしそのことによって見えてくるものがたくさんあり、自分にとって新たな発見、勉強につながって、非常にやりがいがあります。私がこれまでやってきた小さな研究の成果がこういうところに活かされ、社会に還元できれば、非常に嬉しいです。あと残りの期間全力で頑張りたいと思います。

4つのグループが情報交換しあって協力体制を整え、かけがえのない子どもたちを犯罪から守るための「防犯に取り組む人々が学び、その活動を支援するシステム」を形成しようとしています。このプロジェクトに携わっている人たちの研究の分野はさまざまですが、互いの違いを活かしつつ、「防犯」の分野で科学と教育の最前線を駆使して新たな挑戦をしています。多少のとまどいも新しい発見や研鑽につなげるなど、前向きで、柔軟な姿勢が伺い知れました。そしてなんととっても、子どもたちに対する優しいまなざしをお話の随所を感じるということができ、それが「子どもたちを犯罪から守る」という情熱と意気込みとしてプロジェクトを前進させる原動力になっているように思いました。このプロジェクトの成果が早く世に出ることを願ってやみません。
(文 稲葉 幸枝)